

縄文ロマンの旅（25.6.11～25.6.12：縄文阿久友の会 主催）

日 時：平成 25 年 6 月 11 日（火）7 時 30 分～6 月 12 日（水）18 時 15 分

縄文ロマンの旅に参加し、博物館での説明や感想等を記録したものである。

博物館・考古館等

1. 糸魚川ジオパーク 国指定天然記念物 小滝川ヒスイ峡（質・量とも随一）

ヒスイと人間との関わりは、縄文時代にまで遡る。古来より不老長寿など霊力・生命の象徴として珍重。糸魚川で勾玉（古代我が国で装身具等に使った曲がった玉）や大珠（だいじゅ）等に加工されたものが全国の遺跡から出土。国内では鳥取県、兵庫県、岡山県、長崎県、北海道などもヒスイの産地。

昭和 31 年に国の天然記念物に指定された小滝川硬玉産地は、明星山の麓、姫川の支流である小滝川の川原一帯を指し「ヒスイ峡」の名で知られている。硬玉とはヒスイの事で、微細な結晶が絡み合っているため非常に壊れにくい特徴がある。一般的に宝石の原石は磨いてはじめて輝きや美しさが出て来るが、当地のヒスイは川の清流によって自然に磨かれ、原石のままでも十分に美しく存在感がある。（地球や大地をあらわす英語ジオ：Geo）。

ヒスイは、明星山の石灰岩体の上流側にある蛇紋岩中に大きな岩塊として含まれていたものである。小滝川が長い時間をかけて柔らかい蛇紋岩を洗い流し、重たいヒスイが河床にとどまりヒスイ峡ができた。

糸魚川市がヒスイの産地として認知されるようになったのは昭和 14 年の事。縄文時代から古墳時代にかけて盛んだったヒスイ文化は、奈良時代の仏教伝来の影響で次第に忘れ去られ、遺跡から発見されるヒスイは海外渡来ものとされて来た。仏教を利用した中央集権国家の形成に伴って地方の玉作りが歴史の表舞台から消え去ったのでしょ

う。きっかけは昭和 13 年、相馬御風氏の示唆により、伊藤栄蔵氏が小滝川上流の土倉沢で緑色の岩石を発見した事に始まる。

ヒスイは含有金属の量によって色が変わる特性があり、糸魚川での産出量が多い順に、白、緑、紫、青、黒です。日本で発見されていない色は赤と黄。

この地方には長者ヶ原遺跡をはじめ縄文時代にヒスイの玉や蛇紋岩の石斧を大量に生産して列島各地に供給した集落跡が数多く所在する。

昭和 32 年に国の天然記念物に指定された清海川硬玉産地は、多くのヒスイ原石を確認できる。下流の海岸では淡紫（ラベンダー）色のヒスイが多く見られる事から、この海岸は「ラベンダービーチ」の愛称が付けられた。

ヒスイを漢字では、翡翠と書き、石なのに「羽」がついているのは、元々カワセミと云う鳥を意味する言葉だったからである。約 250 万年前の中国（清）にミャンマーから緑とオレンジの美しい石が伝わり、カワセミの羽の色と似ている事から翡翠と呼ばれるようになったそうです。鳥が先で石が後です。

糸魚川のヒスイは約 7000 年前の縄文時代に使われ始めました。世界最古のヒスイ文化です。ヒスイは大珠や勾玉等に加工され、北海道から沖縄まで全国に流通し、中には韓国に渡ったものもある。

（山と清流と原石の美しさに特に感動した）

2. フォッサマグナミュージアム（青海自然史博物館）

平成 21 年 8 月、糸魚川は優れた価値を持つ 5 億年に及ぶ大地の歴史が認められ、日本初の世界ジオパークとなる。フォッサマグナは糸魚川から静岡に至る線ではなく、日本海側から太平洋側にかけて帯状に存在する地域である。フォッサマグナは、ラテン語で大きな（マグナ）溝（フォッサ）と云う意味です。フォッサマグナは、とても深い海でした。

1886 年にフォッサマグナを発見して名前を付けたのは、ドイツ人地質学者ナウマン博士（1854～1927）でした。明治時代に来日し東大教授として地質学者を育てた。博士が調べた横須賀市白仙山や東京江戸橋などで発見されたゾウの化石は、後にナウマンゾウと呼ばれるようになる。

糸魚川の黒姫山（1222m）と明星山（1189m）は、ほぼ全体が石灰岩からなる岩山である。黒姫山の石灰岩は約 90 年前から採掘されている。この石灰岩は海底火山の上に来たサンゴ礁が変化したもので炭酸カルシウムから出来ている。

(フォッサマグナを誤解していた事が分かったと共に美しい石の多さに驚いた)

3. 長者ヶ原遺跡・長者ヶ原考古館 (大規模集落跡・玉と斧の生産交易の拠点)

姫川の河口より約 3Km、標高 90m前後の丘陵にある遺跡で縄文早期から後期に亘って長期に営まれた。集落跡は南北 180m、東西 100mで 4500 年前～3500 年前に最も栄えた。

「奴奈川姫 (ぬなかわひめ)」は、高志国の女王で大国主命が求婚に来たと云う神話もある。また、糸西地方には奴奈川姫にまつわる伝説や神社が多く、神秘的な場所である事が分かる。

「おててこ舞」は、室町時代から続く民俗芸能で国指定を受けている。本来は「根知山寺の延年」と言い法会後に行われた余興の歌舞遊宴の芸能、寿福増長を指す。

「ボッカ」とは、塩荷を信州に運んでいた人で、江戸時代から昭和 30 年代まで続けられた。一人で 100Kg を超える荷を運ぶ事もあった。

(1 割ほどの発掘調査だが、大集落の生活の様子等を伺う事ができた)

4. 寺地遺跡

縄文中期から晩期の集落跡。昭和 42 年～48 年までの 5 回に亘る発掘調査により、玉造工房跡とみられる竪穴住居跡 6 基と巨大な木柱 4 本を伴う特異な配石遺跡が検出された。

(こんなに狭い所で良く玉造りが出来たものだと感心した)

5. 馬高縄文館 (愛称：火焰土器ミュージアム：平成 21 年 9 月開館)

火焰土器の発見地である史跡馬高・三十稲葉遺跡 - その史跡に関わる資料を保存・展示・活用する施設。馬高・三十稲葉遺跡は、信濃川左岸の段丘上にある縄文時代の大規模な集落跡。「遠藤沢」と呼ばれる小さな沢を挟んで、東側に中期 (約 5500 年前) の馬高遺跡、西側に後期 (約 4500 年前) の三十稲葉遺跡が位置。両遺跡は昭和 54 年国史跡に指定。

火焰土器とは、昭和 11 年馬高遺跡で最初に発見された 1 個の土器につけら

れたニックネームで、それ以外の類似した土器は「火焰型土器」と型を付けて呼んで区別している。土偶（ミス馬高）。石棒。王冠型土器。

(初めて火焰土器等の重文に接し、最初が一番が大事である事も理解できた)

6. 馬高・三十稲葉遺跡

馬高・三十稲葉遺跡は、明治時代から土器や石器が採取される場所。中でも関原町の近藤勘太郎、勘治郎、篤三郎の三代の親子は遺物の採集家として名が知られる。

[馬高遺跡]

縄文中期（約 5500～4500 年前）に栄えた大規模集落。火焰土器が出土。土器以外にも三角とう土製品や三角形土版、土偶などの土製品、石斧や石棒、玉類、三脚石器などの石製品といった多くの遺物が二群の馬蹄形状に展開した集落から見つかっている。

[三十稲葉遺跡]

縄文後期（約 4500～3200 年前）の遺跡で、馬高遺跡とは遠藤沢と呼ばれる小さな沢を隔てて営まれた集落である。ここからは新潟県の後期前葉を代表する三十稲葉式土器が出土している。この土器は全体に爪で突いたような「刺突文」と呼ばれる文様が付けられ、また縄文時代には珍しい蓋型土器を作り、煮炊きに使用した深鉢形土器も蓋を受ける事を意識して作られている。蓋形土器の内側にはオコゲが付着しているものもあり、実際に使用されていた事が伺われる。

7. 新潟県立歴史博物館（平成 12 年開館）

縄文人が四季の移り変わりに対応して様々な技術・道具を開発しながら、豊かな食料採集経済を営んでいた。約 2500 年前、今の新潟県の地域にも米を中心とした暮らしが始まろうとしていたが、時代は一気に変わったのではなく、西や南から波が寄せては返す中で段階を経て暮らしが変化していき、やがて倭の国の基礎ができて行く。人々は五穀豊穰や病気平癒などを願い、石に神仏を刻み祈りを捧げて来た。

日本では戦国時代から江戸時代にかけて、越後、佐渡、甲斐等において金山・銀山の開発が活発に行われ、そこで生産された金・銀は貨幣や工芸品として国内だけでなく世界的にも注目を集める。佐渡の相川から出発した金銀は小木から船で出雲崎まで運ばれ、出雲崎からは11日間の行程で、主に北国街道を通過して江戸城まで運ばれた。

(縄文人の世界や新潟県の生活・風土が理解できた他、施設の立派には驚き)

8. 十日町市博物館

[十日町地方の歴史]

十日町地方は豊かな文化遺産を有する歴史の古い地域。この一帯は、今から約50万年前までは海。信濃川が出来たのは約50万年前～30万年前の事。原始時代、この地方にヒトが住み始めたのは約5万年前の中期旧石器時代。縄文時代になると、人々は次第に大きな集落を作って暮らすようになる。笹山遺跡をはじめ、縄文遺跡の密度が高いのがこの地方の特徴である。

古代、古墳時代から奈良・平安時代にかけての大きな集落が馬場上遺跡（博物館とその周辺）。そこでは、米作りや機織りなどが行われていた。

中世、鎌倉時代になると、上野国（現在の群馬県）から新田一族が進出し、大井田氏などを名のり、この地方を治めた。南北朝時代、大井田一族は南朝方として活躍したが、奮戦むなしく滅びる。その跡は約60ヶ所もの城館跡として残っている。時宗など宗教文化もこの時代に栄えた。

近世、江戸時代、この地方は幕府の直轄地（天領）、直轄地でありながら会津藩預り、白河藩領などに分けられた複雑な支配を受けたが、越後縮の主産地として目覚ましい発展を遂げる。

近世～現代、明治維新では、戊辰戦争の官軍の通り道になる。その後は、学校や道などが整備され近代化が進む。明治33年の十日町大火では、市街地の大半を失う。昭和29年と平成17年の合併により現十日町市となる。

[雪と織物と信濃川]

十日町地方の生活と文化は、雪と織物と信濃川によって育まれた。

この地方は、都市としては世界一の豪雪地帯。積雪は平均2.5m。最高は4.25m。降雪の累計は21m。この地方の雪は湿り気が多く、1m³約350kg。重要文化財の「十日町の積雪期用具」は人々の知恵や技などをしのばせる。

[織物]

アングンは、縄文時代以来の編布で、十日町織物の源流として注目。奈良の正倉院には、約 1200 年前の越後布がある。越後布はこの地方の特産物で、白越、白布ともいわれた高級織物でした。その後、改良が加えられ、江戸時代には越後縮として全国に名をとどろかせた。

明治になると、その伝統と技術が絹織物に生かされ、昭和初期には明石縮として全国に風びした。織物は現在でも基幹産業である。

[信濃川 - まさしく母なる川]

この地方の河岸段丘は日本一。かつての信濃川には、米など運ぶ荷舟が通り、対岸に人々を運ぶ渡し船があった。また、サケ、マスなどが沢山とれた。昭和になると水力発電所の建設ですっかり姿を変える。今は都市へのエネルギー供給地である。

[国宝・笹山遺跡出土品]

信濃川上・中流域は遺跡の宝庫。笹山遺跡は縄文中期から後期と中世の集落遺跡である。昭和 55 年～60 年の調査で 112 棟の住居跡、多数の土坑、埋設土器などが見つかる。火焰型・王冠型土器など当地域を代表する土器が、東北・北関東・中部高地・汎北陸系など他地域の土器を伴って多数出土している。

このほか、石鏃・石槍・石斧・磨石・石皿などの石器類も豊富。土偶・耳飾などの土製品、垂飾や石棒などの石製品も多数見つかっている。

平成 11 年 6 月 7 日、笹山遺跡出土深鉢形土器 57 点（附 871 点）が国宝。

(当地方の豊かな文化の一つであるアングンについて初めて知る)

[参考：主な石器の機能・用途ほか]

狩猟 - 石鏃（せきぞく）→矢じり、石匙（いしさじ）→ナイフ

採取 - 打製石斧（だせいせきふ）→土堀具（クワ、スコップ）

採取 - 石錘（せきすい）→綱、釣り、編物のおもり

加工 - 磨石（すりいし）→調理具（すりこぎ）

加工 - 石皿（いしざら）→調理具（すり鉢）

加工 - 凹石（くぼみいし）→調理具（木の実割りの台）

加工 - 磨製石斧（ませいせきふ）→木材伐採、加工具（斧、手斧、ノミ）

なお、平安時代に編纂された延喜式などによると、糸魚川・西頸城地方は「奴奈川（ぬなかわ）」と呼ばれていたようである。

（以 上）